

銅造華原磬 国宝

この貴重な楽器は興福寺の西金堂が734年に建立された際にこの建物に収められた。八部衆像とともに、金光明經の一場面を思わせる情景を形成していた。

もともと、この楽器は「金鼓（こんく）」と呼ばれていたが、室町時代（1336～1573年）までには華原磬または華原の鉦と呼ばれるようになっていた。これは、中国の華原地方（華原県）に由来している。この地域は、現在の陝西省耀州にあたり、このような鉦に使われる石板の産出地であった。現在のこの鉦の打ち金部分は石ではなく金属でできており、鎌倉時代（1185～1333年）に取り替えられたものである。

銅の合金製で、座った獅子の後ろに取り付けられた金属の棒は平安時代（794～1185年）に付け加えられたものである。雄と雌の龍が棒の上端に絡みついて、外側を睨んでいる。打ち金は、もともとは金箔が貼られていたと思われるが、2匹の龍のカーブした胴体の間に吊り下げられている。この鉦には、精緻な職人技が示されており、龍のうろこひとつひとつ、毛の一本一本がすべて細かく表現されている。鑄造の細かさは、この作品が日本でつくられたものではないということを示唆している。おそらく唐時代（618～907年）の中国で鑄造されたものであり、奈良時代（710～794年）に日本にもたされたものであろう。